

協伸商会穀物レポート [KKR] Vol. 020

(2019/20年度 USDA 米国農務省 3月10日発表)

[ハイライト] ①今月の世界の穀物/大豆の生産・消費・貿易量の見通しについては各品目とも前月比ほとんど変動はなく今年度の数字はほぼ固まったと言えるが、ここに来て2月初頭に顕在化してきた「新型コロナウイルス」が大きな変動要因として急浮上してきている。②特に懸念されるのは、世界的な行動規制から USDA 数字ではまだ表れていないが穀物消費/貿易量の減少が表面化することである。③市場ではそれが特に小麦の世界で懸念が強く、シカゴ定期は前月比¢38(7%)下落と大きく反応している。④この「コロナショック」の煽りであれ程騒いだ中国「ASF」は何処かに吹き飛んだ感があるが、諸統計(豚飼養頭数減/食肉輸入急増等)を見てもまだ長期戦を覚悟する必要があると同時に日本の水際防疫対策も徹底する必要がある。⑤一方 BRA 大豆生産予測は史上最高の126百万トと US (97百万ト)を遥かに凌駕しているが、1月から始まった収穫は2月末進捗43%、輸出実績510万トと順調。⑥また1月の米中貿易協議「第一段階合意」に基づく中国の US 農産物輸入拡大は大豆が最大のポイントになるが現状では3月 PNW 積が約15万ト程度であり、BRAの輸出攻勢の前に履行は中々厳しいと言わざるを得ない。⑦そろそろ市場では来年度2020/21の観測が始まっているが USDA 農業観測会議の米国作付面積予測は、コーン8,660万エーカー(前年比+6.3%)、大豆8,500万エーカー(同+11.7%)と前年が大雨洪水等で減少したこともあるが、米中貿易拡大を期待して大きく伸びている。

1、世界穀物需給の概要(大豆除く)

- ① 生産量: 2,667百万ト(前年比1.5%増、前月比0.1%増)
- ② 消費量: 2,671百万ト(前年比1.0%増、前月比変わらず)
- ③ 貿易量: 428百万ト(前年比▲0.1%、前月比▲0.2%)

2、とうもろこし

- ① 生産量: 1,112百万ト(前年比▲1.0%、前月比変わらず)
- ② 消費量: 1,135百万ト(前年比▲0.8%、前月比変わらず)
- ③ 貿易量: 166百万ト(前年比▲8.2%、前月比変わらず)
- ④ 概況: 前月比では各数字全く変動が無いが、生産では BRA は1億ト越(輸出34百万ト)を確実にし、UKRも36百万ト(輸出30百万ト)と US が苦戦する中この2か国がその存在感を高めている
価格は\$3.77/Bu(前年\$3.64/Bu、前月\$3.84/Bu)と前月比¢7下落した。

3、小麦

- ① 生産量: 764百万ト(前年比4.5%増、前月比0.1%増)
- ② 消費量: 755百万ト(前年比2.4%増、前月比0.1%増)
- ③ 貿易量: 184百万ト(前年比5.8%増、前月比0.4%増)
- ④ 概況: 前年比全体的にボリュームは底上げされているが、特に IND 生産は一昨年比5百万ト増と史上初めて1億トの大台乗せた。消費/貿易量は前述した「コロナショック」の影響を一番受けやすいが今後どうなるか注目。
価格は\$5.21/Bu(前年\$4.54/Bu、前月\$5.59/Bu)と前月比¢38下落した。

4、大豆

- ① 生産量: 342百万ト(前年比▲4.7%、前月比0.7%増)
- ② 消費量: 350百万ト(前年比2.1%増、前月比▲0.3%)
- ③ 貿易量: 152百万ト(前年比2.4%増、前月比0.3%増)
- ④ 概況: 生産量は昨年比 BRA 増産はあったが US 減(125⇒97百万ト▲20%)の為全体では5%近く減少。中国輸入予測は88百万トと前年比3百万ト増だが ASF の影響をどこまでカウントしているのか若干疑問。
価格は\$8.83/Bu(前年\$8.99/Bu、前月\$8.82/Bu)と前月比¢1上昇した。

世界の穀物・大豆等の需給

2020年3月10日
米国税務省発表：単位100万トン

主要穀物世界の需給						
	生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量	
全穀物	2017/18	2,619	3,418	415	2,600	817
	2018/19	2,627	3,444	428	2,643	801
	2019/20	2,663	3,464	429	2,671	793
	3月	2,667	3,467	428	2,671	797
小麦	2017/18	763	1,026	182	742	284
	2018/19	731	1,015	174	737	278
	2019/20	764	1,042	183	754	288
	3月	764	1,042	184	755	287
粗粒穀物 (とうもろ こし等) 注1	2017/18	1,362	1,747	185	1,376	371
	2018/19	1,396	1,767	211	1,419	348
	2019/20	1,403	1,750	201	1,424	327
	3月	1,403	1,751	200	1,423	327
大豆	2017/18	342	437	153	338	99
	2018/19	359	458	148	346	112
	2019/20	339	451	152	352	99
	3月	342	454	152	351	102

世界のとうもろこし需給							
	期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量	
世界計	2月	320.47	1,111.59	167.99	1,135.22	165.77	296.84
	3月	320.81	1,112.01	168.62	1,135.47	165.83	297.34
アメリカ	2月	56.41	347.78	1.27	313.58	43.82	48.07
	3月	56.41	347.78	1.27	313.58	43.82	48.07
アルゼンチン	2月	3.61	50.00	0.01	15.00	33.50	5.12
	3月	2.61	50.00	0.01	15.00	33.50	4.12
ブラジル	2月	4.58	101.00	1.20	66.50	36.00	4.28
	3月	5.19	101.00	1.20	67.00	36.00	4.39
EU	2月	7.84	65.00	21.00	82.50	2.80	8.54
	3月	7.84	65.00	21.00	82.50	2.90	8.44
日本	2月	1.44	0.00	16.00	16.10	0.00	1.34
	3月	1.44	0.00	16.00	16.10	0.00	1.34
中国	2月	210.32	260.77	7.00	279.00	0.02	199.07
	3月	210.32	260.77	7.00	279.00	0.02	199.07
ウクライナ、 ロシア	2月	1.32	50.30	0.06	13.75	36.70	1.23
	3月	1.67	50.08	0.06	13.75	36.70	1.35

脚注1：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麥、ライ麦等の計で約80%がとうもろこしである。
脚注2：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：9月～8月。
脚注3：ウクライナ、ロシアは両国の合計。

世界の大豆需給							
	期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量	
世界計	2月	111.22	339.40	150.80	351.06	151.50	98.86
	3月	111.88	341.76	150.75	350.07	151.88	102.44
アメリカ	2月	24.74	96.84	0.41	60.77	49.67	11.55
	3月	24.74	96.84	0.41	60.76	49.67	11.56
アルゼンチン	2月	28.89	53.00	3.90	51.70	8.20	25.89
	3月	28.89	54.00	3.90	50.70	8.20	27.89
ブラジル	2月	30.42	125.00	0.15	46.40	77.00	32.17
	3月	30.48	126.00	0.15	46.40	77.00	33.23
中国	2月	19.46	18.10	88.00	103.70	0.13	21.73
	3月	19.46	18.10	88.00	103.70	0.13	21.73
EU	2月	1.23	2.60	15.20	17.61	0.25	1.17
	3月	1.73	2.60	15.20	17.61	0.25	1.67

世界の小麦需給							
	期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量	
世界計	2月	278.27	763.95	180.09	754.19	182.82	288.03
	3月	277.57	764.49	180.81	754.93	183.62	287.14
アメリカ	2月	29.39	52.26	2.86	31.71	27.22	25.58
	3月	29.39	52.26	2.86	31.71	27.22	25.58
アルゼンチン	2月	1.74	19.00	0.01	6.15	13.00	1.60
	3月	1.74	19.50	0.01	6.15	13.50	1.60
オーストラリア	2月	4.96	15.60	0.55	8.70	8.20	4.21
	3月	4.96	15.20	0.55	8.70	8.00	4.01
カナダ	2月	6.04	32.35	0.45	9.70	23.50	5.64
	3月	6.04	32.35	0.50	9.90	23.00	5.99
EU	2月	10.00	154.00	5.30	127.00	32.00	10.30
	3月	10.00	154.00	4.80	126.50	32.00	10.30
中国	2月	139.77	133.59	4.00	128.00	1.10	148.26
	3月	139.77	133.59	4.00	128.00	1.10	148.26
インド	2月	16.99	102.19	0.02	98.00	0.50	20.70
	3月	16.99	103.60	0.02	98.00	0.50	22.11
ロシア	2月	7.82	73.50	0.48	39.50	34.00	8.29
	3月	7.82	73.61	0.48	39.50	35.00	7.40
ウクライナ	2月	1.59	29.00	0.08	8.90	20.50	1.26
	3月	1.59	29.00	0.08	8.90	20.50	1.26

世界の穀物生産/消費/輸入大國＝中国とその食糧政策(2)

中国の穀物生産拡大とその異常とも言える在庫数量の実態については先月号で述べたが、歴史的に中国の食糧政策推移を見るとその内容は以下の通りである。

- ①中国の食糧政策は、1949年建国以来「食糧を要とする」(以糧為綱)を基本として1958年「人民公社」を設立したがその悪平等主義/非効率性/生産意欲低下等から1982年に解体、1980年以降鄧小平の改革開放路線のもと「農家生産請負制」(実質的な個人経営容認)に切り替え国内増産をすすめてきたが、需給変動の中でその具体的政策は紆余曲折を経てきている。近年における食糧政策の変遷は「別表1」の通り。
- ②中国は、1990年前後からの食糧需給逼迫によって1996年以降「食糧自給95%」の政策を掲げ「食糧増産を進めてきた」のがその政策の核になったのは国家財政による保護価格を通じた「食糧生産支援」である。この基本政策は2008年制定の「国家食糧安全中長期計画」(2008～2020)でも継続されたが、結果的には1999年まで4年連続大豊作の生産過剰に陥り「財政負担膨張」「市場価格低迷」「市場価格低減」をもたらしたその政策の一時的修正を余儀なくされた。
- ③その中で中国は2000年以降国家財政負担の軽減とWTO加入への対応として食糧の保護価格買付の段階的廃止と流通自由化等と併せ減反政策「退耕還林」(田畑を森林に戻す)を行ったが小麦/玉米生産は想定以上に縮小し、ブレエキを踏みすぎる結果となった。
- ④中国はその状況を受け、2004年以降再び食糧増産に舵を切り生産者への直接生産補助金(◎食糧作付奨励金 ◎生産資材総合補助金 ◎優良種子補助金 ◎農業機械補助金の4件)により毎年1400～1600億元(約2兆4000億円)支給、併せて小麦/玉米の2品目については農家の増産意欲を刺激する「最低買付価格制度」を導入することとした。
- ⑤その「最低価格買上制度」の近年の作物別推移は「別表2」で示した通りであるが、小麦は2007→2015年(1.44元→2.36元/k)63%値上、玉米は(概)1.40元→2.70元/k)93%値上、コーンは(1.48→2.36)59%上昇と其々大幅な値上げとなった。この政策は2016年以降修正され「目標価格制度」(目標価格を設定し市場価格との差額を政府が直接農家に支払う＝不足払い制度)として継承されている。
- ⑥この結果、中国は2004年以降食糧増産にアクセルがかかり17年まで連続14年にわたり増産となったが、主要穀物の国内価格は買付価格の引き上げにより2012年以降恒常的に輸入価格を上回るようになった。その格差レベルは、国際価格の低位安定の背景もあり、各品目でバラつきはあるが概ね1～2割程度と評価されている。その結果、食品/飼料メーカー等は輸入品を優先的に購入しておりこのことが政府在庫を記録的な水準まで押し上げ、財政を圧迫し一部野積する事態も引き起こす要因ともなっている。
- ⑦中国の食糧政策は、以上のように需給関係に応じアクセルとブレーキを踏み分けてきたが、14億の人口と膨張する食肉需要を背景に基本的には可能な限り国内生産を拡大するという大きなベクトルが働いている。ただ、現実的にはそれだけでは賄いきれないレベルまで国内穀物需要は急拡大し2013年には油糧種子(大豆)等は不足分を輸入するという食糧政策の大転換が行い、海上貿易量を大きく底上げする結果となった。
- ⑧中国はなぜ輸入価格を上回るレベルでここまで農家からの穀物買付価格維持する必要があるのか…。それは農業生産の安定化と都市部と比べ経済的に立ち遅れた農業/農民/農村の「三農問題」への対応、それに農村人口の急激な都市流入を抑制するという社会政策的な色彩が強いと想定される。
- ⑨更に基本的な問題として、中国はどこまでその需要を賄う食糧穀物生産が可能なのか…。そのベースとなる中国農業生産基盤/農村社会/土地問題等がどうなっているのかを検証する必要がある。また同時に、人口動態/肉食/油脂消費等を踏まえた穀物需要予測等から、将来的に海上輸送と結びつけてくる輸入穀物数量がどうなるのか等についてコメントを次回続けたいと思います。

別表1 <近年の中国の食糧・農業政策の変遷>

期間	内容	結果
保護価格期 (1993～99)	<生産者保護の強化を通じた農業生産の拡大> ・一定の保護価格の下で、農家の余剰食糧も含めて買い付け	・食糧は生産過剰となり、食糧在庫も膨大となった
食糧流通自由化期 (2000～03)	<食糧流通の自由化と農業生産の重点的強化> ・国庫負担の軽減とWTO加入への対応として、食糧の保護価格 買い付けの段階的廃止及び流通の段階的自由化(2000年～) ・全国一律の食糧生産振興から、食糧主産地に優良品種、新技術 導入等の支援を集中させる地域選択的な生産振興に転換	・食糧価格が下落する中で、食糧生産は縮小 ・都市と農村格差の顕在化
食糧生産拡大期 (2004～現在)	<三農問題への対応と農業生産の安定化> ・米麦について最低生産者価格制度の導入 ・農家に対する生産補助(食糧作付奨励金、生産資材総合補助金 優良種子補助金、農業機械補助金)と三減免(農業税等)の実施	・食糧生産は再び増加、在庫数量増大

別表2 <政府買付価格の推移>

生産年	白小麦	米	コーン	大豆
2007	1.44	1.40	1.48	3.70
2010	1.80	N/A	1.78	3.80
2013	2.24	2.70	2.22	4.60
2015	2.36	2.70	2.36	4.80
上昇率 (2015/2007)	163%	193%	159%	130%

備考 1.米は早稲インディカ種(もみベース)

2.コーンは黒龍江省基準

単位: 元/kg(1元=17円)